

世阿弥自筆本(柏崎)にみる父と子の絆

鵜澤瑞希

世阿弥改作の能(柏崎)には、世阿弥自筆の能本が現存している。もともとこの能は榎並左衛門五郎の原作だったのを、世阿弥が(土車)から切り取ったクセを移入し、何度も手を加えて今の(柏崎)の形に近づけたと『申楽談儀』に語られている。世阿弥自筆本(柏崎)(以下自筆本)は、世阿弥の直筆というだけでも貴重だが、それに加えてこの本文には現行の(柏崎)や他の写本には見られない独自の詞章があり、改作途中の(柏崎)の形を知ることができる点でも重要な資料である。独自の詞章というのは、例えば次のワキツレの台詞である。(以下引用は横道萬里雄・表章校注『謡曲集』上、岩波書店、一九六〇)

これは善光寺の住侶にて候、この寺には諸国より身を捨て人多く集まり候、今に始めぬことにて候へども、このほど不思議なる道心者の候、いまだ年も足らぬ人來りて、捨身の行世に越えて候ふほどに人みなあり難きことに申し候、この法師師弟子の契約をなし、共に念仏三昧の行を致し候

後場の冒頭にあたる第四段、善光寺の門前に僧が登場して、子方の花若が出家後どうな

ったのかを説明している場面である。他本の当該箇所は似た内容の詞章ではあるが、これとは少し違った形で僧が名乗る。一見すると現行の詞章との違いはさほど大きくはない。しかしここには、父を亡くした少年花若の内面が、他では見られない形で描かれている。これより前の所で、花若は父の急死を嘆いて、母に手紙を残して無断で出家し、行方をくらましてしまう。手紙には次のように書かれている(第三段)。

父御前勞はりつき給ひ、いかかと騒ぎ申せども、無常の慣らひ力なく、終に空しくなり給ふ、心のうちの悲しさは、ただ思しめしやらせ給へ、われも帰りておん姿、見参らせたくは候へども、思ひ立ちぬる修行の道、もしや留められ申さんと、思ふ心に障へられて、心強くも出づるなり、命つれなく候はば、三年のうちに参るべし

花若は手紙の中で修行の旅に出ることを告げている。母への愛がないわけではなかったが、出家の妨げになるという理由で、花若は母に会うことなく旅に出たのだった。彼の思いは、生きている母よりも死んだ父に向いて

いる。「命つれなく」以下は、「惜しくもない命が長らえてしまったのなら、三回忌までには会いに行きましよう」という意味で、花若は父の死に絶望して死んでしまいたいとすら思っている。その思いが、ワキツレの台詞で「捨身の行世に越えて候ふ」という形で表れている。花若は死ぬ代わりに、「世に越えて」とあるような、大人でも耐えがたい厳しい修行に出て、その結果「諸国より身を捨て人多く集」まる善光寺の門前で、花若の修行への姿勢は「あり難きこと」と称讃された。このような花若の捨身の背景には、雪山童子のような捨身の童子のイメージもあると考えられるが、それ以上に、父と子の強い絆によって結ばれた中世武家家族の、親子の愛情のあり方が表れている。

花若のような、父を何より大切に思う息子は、中世文芸の世界では珍しくない。軍記物語には、父の身代わりに犠牲になる子、父と戦場を共にしようとはせ参じて命を投げ出す子など、父を慕う健気な息子の例が見られる。たとえば『平家物語』『知章最期』には、父の平知盛を守って討死する、十六歳の息子知章の最期が語られる。似た話で、『太平記』第九巻に河野通治の身代わりになって討死する、十六歳の猶子通遠の話もある。また第二巻には、能(檀風)の本説になった十三歳の阿新丸(日野邦光)の敵討の話があり、第六巻には戦死した父を追いかけてきた、十八歳の本間資忠の自害が語られる。『明徳記』にも、山名氏清の十七歳の猶子小次郎が氏清と最期を共にするため、故郷の母を残して戦場に出る話が

ある。

いづれも十代の若武者の勇氣と、父への忠義や愛を描いた例である。すべてに共通するのは、父が死ぬときには自分も死ななければならぬという、子どもの側の強すぎる覚悟がある点である。戦争を生業とする武家家族の子どもにとって、父は愛する家族であるのと同時に、従うべき武士団の長でもある。この場合の父への愛には、家族愛だけでなく帰属集団の長への忠誠心も含まれていると考えられる。『太平記』の本間資忠の例などは、殉死する家臣の忠誠に通じるものがあるだろう。武家の父子には、肉親の愛情を越えた、武士としての命がけの強い絆があったのではないだろうか。

能の中にもこのような家族の形が表れている。世阿弥の『申楽談儀』に見える散逸曲(初若の能)は、勘当された初若という子が、父が戦に出ることを聞いて、戦場へ駆けつけ、敵に捕らえられるという内容だったらしい。また同じく『申楽談儀』にある(笠間の能)は、父に死なれた敗軍の子の勇ましさと悲しみが描かれる。時代が下って、寛正六年(一四六五)成立の(鶴次郎)は、負ける戦を前にした父と子の、家族愛と武勇が眼目となる能である。この能の前場には、「息子を死なせてくれるな、必ず生きて帰してくれ」と妻に懇願されたシテが、故郷へ落ち延びるよう息子を説得する問答がある。父(シテ)の説得は結局失敗し、子どもは自分の勇氣を示して父と一緒に討死することを望む。この構想のちに定型化して、後世の作品に受け継がれていく。こ

れらの能の中では、子どもが母への愛情を見せることもあるが、最終的に子どもは母への愛を捨てて死にゆく父を追いかける。ここでもやはり、父と子の絆の強さが強調されているのである。

(柏崎)の花若の「われも帰りておん姿、見参らせたくは候へども」以下の言葉にも、そういった精神性が表れているのではないだろうか。本当は父を亡くした時、戦場の若武者同様、父と運命を共にしたいという気持ちがあったのだろうが、戦争でもない状況では命を捨てることもできない。そのため命を捨てる覚悟で捨身の修行に出たのである。そしてその強い決意は、母との再会の場面では「あさましやなにとて狂乱にはなり給ひけるぞや、人目の隙を計らひて名のらばやと思ひ候。」(第八段)という言葉になって再び表れてくる。花若は物狂になった母を見て、名乗ることをためらっている。親子の再会を妨げるこのような台詞は物狂能によくみられる表現ではあるが、自筆本の流れから考えると、この言葉も父を愛する花若の心情として意味を持つ。修行の妨げとなる母を捨てようとしているのである。しかも「なにとて狂乱にはなり給ひけるぞや」と言って、母の悲しみを理解していない。

一方で、父を深く愛する心情は、母の側にもみえている。母は花若のことを夫の形見と考えており(第三段)、また後場の物狂の場面では夫への恋慕がずっと語られていくが、子どもへの思いはあまり表されていない。母に

とつても一番大事なのは父なのである。その亡き人への思いの強さが、母と子の心のすれ違いを生むこととなる。そういうすれ違う家族の姿を、自筆本では描こうとしていたのではないだろうか。

自筆本が目指した家族像は、母子の物狂能の中では類型から外れた変わった構想である。そのためか、世阿弥の周囲からは受け入れられなかったようだ。この構想はのちの時代の(柏崎)謡本にはまったく踏襲されていない。各流儀には別の本文を持つ(柏崎)が伝わり、その本文も、母子物狂能の型にはめようという後人の意図によって手が加えられていく。自筆本の父と子の関係は、(柏崎)の中から消えてしまう。

だが世阿弥は、(柏崎)のような父子の濃い関係を、繰り返し能の題材にしていた。井阿弥作の(丹後物狂)は、もとは子どもを探し歩く父と母の能であったのを、世阿弥が母の存在を除いて、父一人の物狂能に改めたという(『申楽談儀』)。他にも、失踪した父を子どもとその従者が探し歩く(土車)、(多度津左衛門)などを手掛けている。世阿弥は物狂能の新しい題材として、父子の愛を表現する方法を模索していたのかもしれない。

もちろん、父と子の関係は(柏崎)の主題ではない。だが、物狂の契機となった家族の喪失の裏に、母を置き去りにしてしまうほどの父と子の強い絆があったこと、それが中世武家社会の家族を描いた文芸の中ではよく見られる家族の姿だったことを指摘したい。

(東京大学大学院総合文化研究科特任研究員)